

A case of DES implantation for recurrent in-stent occlusion in SFA

JCHO Sapporo Hokushin Hospital, Japan

Atsushi Nakano

症例は、80代、男性。2011年左SFAに留置されたWallステント(8.0×38mm)ISRにPOBA施行され、その遠位狭窄にZilverステント(7.0×60mm)が留置されたが、翌2012年、Wallステントが完全閉塞し、それに対してPOBAが施行され、その近位狭窄にSMARTステント(6.0×60mm、6.0×100mm)が留置された。2012年11月から左間欠性跛行が出現。造影CTでステント再閉塞が疑われ、2013年1月当科入院。下肢造影では、以前留置された左SFAの複数ステント内が完全閉塞しており、後日、同部位にEVT施行。ガイドワイヤーはWallステント内以外は、比較的容易にクロスし、その大部分が血栓閉塞の可能性を疑った。IVUS所見では、Wallステント内は強い新生内膜増殖を示していた。病変部を小口径バルーンで拡張後、血栓吸引を施行したところ大量の赤色血栓が吸引された。繰り返すSFA再狭窄・閉塞の原因として、Wallステント内のISRを原因として疑い、Drug-eluting stentであるZilver PTXステント(6.0×120mm)を病変full coverするように留置した。6か月後の確認造影では、左SFAに明らかな狭窄所見なく、約1年後においても下肢症状なく経過している。薬剤溶出性バルーンが使用できない現状では、繰り返すSFAステント内の再狭窄・閉塞例でDESが有効な場合があり、若干の文献的考察加えて報告する。